資料　当４

令和４年度　北海道CLASSプロジェクト実施計画書（２年次）

学校名	北海道当別高等学校
作成日	令和４年６月２０日

１　今年度の目標と取組計画

月	取　組
２年次 （R4） 【予定】	（目標） ・総合的な探究の時間のカリキュラム完成 ・総合的な探究の時間の本格導入 ・コーディネーター機能を活用し、地域資源を活用した実践 ・地域連携の深化による協働体制の確立 （主な取組） ・１，２年生によるフィールドワークを実施 ・郷土芸能を学ぶ取組 ・地域の歴史、課題を学ぶ取組 ・コーディネーターと教職員による協議

２　今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
地域理解、地域とのつながり	生徒へのアンケート
高校理解、高校とのつながり	学校関係者アンケート
プロジェクトの理解、定着	教職員アンケート

３　今年度（令和４年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	プロジェクト推進会議・校内委員会	当別を知る講話（歴史）Ⅰ①
5	コンソーシアム会議・校内委員会	当別を知る講話（現状）Ⅱ①、SDGs 学習①
6	プロジェクト推進会議・校内委員会	フィールドワークⅠ②
7	プロジェクト推進会議・校内委員会	伝統芸能Ⅰ①、フィールドワークの発表会②
8	コンソーシアム会議・校内委員会	学校紹介②
9	プロジェクト推進会議・校内委員会	フィールドワークⅠ①
10	プロジェクト推進会議・校内委員会	フィールドワークの発表①
11	コンソーシアム会議・校内委員会	
12	プロジェクト推進会議・校内委員会	キャリアクェストタイム①
1	プロジェクト推進会議・校内委員会	郷土芸能②
2	コンソーシアム会議・校内委員会	校内発表①、校内発表②
3	プロジェクト推進会議・校内委員会	課題整理と次年度に向けた計画

４　小・中学校との連携を強める取組

・とうべつ学園、西当別中学校をはじめとした中学生への学校紹介
・本プロジェクトのコンソーシアムへ中学校関係者（校長）の参加
・中学生に向けたアンケートの実施

５　その他特記すべき事項

資料　当５

令和４年度　北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（２年次）

学校名	北海道当別高等学校
作成日	令和５年３月２２日

１　今年度の検証について

①	検証の項目	生徒が当別高校へ入学後に成長できたか
	検証の方法	アンケート（５月、１１月）
	検証結果	5 月　89.4%　11 月　85.5%　内容（できた　少しできた） この内容は途中経過ととらえ、来年度の上昇に期待したい。

②	検証の項目	当別町への理解・興味が深まったか
	検証の方法	アンケート（５月、１１月）
	検証結果	5 月　69.0%　11 月　77.6%　内容（深まった　少し深まった） 地域と連携した様々な授業を実施したことにより上昇した。

③	検証の項目	当別町の認知度
	検証の方法	アンケート（５月、１１月）
	検証結果	5 月　32.7%　11 月　47.9%　内容（知っている　少し知っている） 上記と同様に上昇したが、取組内容の深化が問われている。

④	検証の項目	町民との関わり
	検証の方法	アンケート（５月、１１月）
	検証結果	5 月　28.3%　11 月　42.2%　内容（10 人以上　5～9 人） ③と同様

２　当事者の声について

生徒	本プロジェクトで実施した内容を通じて､町の特色を知ることができたこと､そして町民の人間的な優しさに触れることができたとの声が多かった。
教諭	学年を中心に３科一体で試行錯誤を繰り返した結果､来年度以降は専科の特性もふまえ、各科ごとに実施することになった。
地域の方	商工会員へのアンケートでは､IT 技術やコミュニケーション能力をもった生徒を地元企業で採用したいとの声を多数いただいた。

３　今年度（令和４年度）の取組について

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
4	4/26（火）第 11 回プロジェクト会議	・当別探究オリエンテーション（4/21） ・1 年生当別町を知る講話（4 月～5 月） ・1 年生地域の課題を知る（5/13）
5	5/9（月）第 1 回課題解決委員会 5/31（火）第２回コンソーシアム会議	

資料　当５

６	6/13（月）第２回課題解決委員会 6/27（火）第 12 回プロジェクト会議	・２年生フィールドワーク（6/3）
７	7/11（月）第３回課題解決委員会 7/25（月）第 13 回プロジェクト会議	・１年生郷土芸能（すずめ踊り）（7/1）
８	8/5（金）CLASS プロジェクト道央圏会議 8/22（月）第４回改題解決委員会	・２年生学校紹介（おもてなし）（８月～９月）
９	9/1（木）第 14 回プロジェクト会議 9/5（月）第３回コンソーシアム会議 9/20（火）第５回課題解決委員会	・１年生フィールドワーク（9/16）
10	10/21（金）第 15 回プロジェクト会議	
11	11/7（火）第６回課題解決委員会	
12	12/1（火）第７回課題解決委員会 12/26（月）第８回課題解決委員会	・１年生キャリアクェストタイム（12/2） ・１年生認知症サポーター講座（1/20）
１	1/12（木）札幌新陽高校視察	・２年生郷土芸能（すずめ踊り）（1/20）
２	2/9（木）当別探究発表会事前打合せ 2/24（金）伊達開来高校視察	・「当別探究発表会」（2/17）
３	3/9（木）担当者打合せ	

４　小・中学校との連携を強める取組について

・２年生の生徒が地元中学生の本校に対するアンケート結果に基づき、本校の魅力を伝えるパンフレットを作成し、全中学生へ配布した。
・コンソーシアム委員にとうべつ学園、西当別中学校の校長に参加してもらった。
・とうべつ学園、西当別中学校へ向けたアンケートを実施し、依然として厳しい評価結果であったものの、本校の魅力化推進への参考にすることができた。

５　学校独自の取組・工夫・実践について

(1) 組織化に関する取組・工夫・実践（校内体制含む）

・石狩教育局の方々、にも積極的に参加いただき地域コーディネーターを中心に「プロジェクト推進会議」を定期開催し、本プロジェクトの推進を後押しした。
・全学科、学年が加わっている「課題解決委員会」を中心にカリキュラムを検討するために定期開催し、来年度以降は３科がそれぞれ「総合的な探究の時間」を実施することになった。

(2) 地域コーディネーターとの連携に関する取組・工夫・実践

・本プロジェクト内で実施する授業の計画、立案、実施や適材適所での町民の参加、コンソーシアム委員の選定、コンソーシアム会議の開催について主体的に関わってもらった。

(3) その他

資料　当６

令和５年度　北海道CLASSプロジェクト実施計画書（３年次）

学校名	北海道当別高等学校
作成日	令和５年４月２８日

１　今年度の目標と取組計画

月	取　組
３年次 （R5）	（目標） ・当別高校で育成する６つの力 「尊敬心」「創造力」「積極性」 「探究力」「協調性」「課題解決力」の実践を通して育成する。 （主な取組予定） ・実践に必要な基礎知識を学ぶテキスト作成 ・生徒のレポート作成に対する教員のフィードバックの実施 ・事業者とのコラボレーションに関するマッチング ・事業者と共に、地域の課題解決を実践

２　今年度の検証の項目と方法

検証の項目	検証の方法
Collaboration	地域コーディネーター・事業者等と連携を図っているか （メールの履歴等で検証）
Literacy	講義・テキスト等から学んだことを実践できているか （生徒のレポートから検証）
Adult	地域の事業者・教員が生徒の主体性を育成しているか （生徒のレポート・教員のフィードバックから分析）
Student	生徒の主体性、当高力が育成されているか （アンケート結果、生徒のレポート等から検証）
System	持続可能な組織、体系的なカリキュラムが構築できているか（年間計画と実際の比較より検証）

３　今年度（令和５年度）の取組

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等	主な学習活動
４	地域コーディネーターとの打ち合わせ 事業者と生徒のマッチング	４月　生徒への動機づけ（講義） 事業者とのマッチング 「探究学習」の基礎講座 ５月～８月 事業者と実践活動（各グループ） コンソーシアム会議 町内の小中、大学との連携事業
５	地域コーディネーターとの打ち合わせ 事業者と生徒による地域課題の解決	
６	地域コーディネーターとの打ち合わせ 事業者と生徒による地域課題の解決	
７	地域コーディネーターとの打ち合わせ 事業者と生徒による地域課題の解決	
８	地域コーディネーターとの打ち合わせ 事業者と生徒による地域課題の解決	

資料　当６

９	地域コーディネーターとの打ち合わせ 事業者と生徒による地域課題の解決	
10	地域コーディネーターとの打ち合わせ 事業者と生徒による地域課題の解決	９月　これまでの活動の振り返り 発表に関する説明（講義） 発表スライドの作成 １０月～１月 コンソーシアム会議 校内、校外での発表会 通年　レポートの作成
11	地域コーディネーターとの打ち合わせ 活動の振り返りと、発表準備	
12	地域コーディネーターとの打ち合わせ 活動の振り返りと、発表準備	
１	地域コーディネーターとの打ち合わせ 発表会	
２	１年間の振り返り、成果と課題	
３	来年度に向けた成果と課題の検証	

４　自走可能な体制整備に向けた方策

・コンソーシアムのコミュニティ・スクールへの移行準備
・活動資金の詳細を作成し、振興局や町等に協力を依頼
・北海道大学環境科学院　山中康裕教授との連携
・校内体制の改善、整備
・生徒への効果的なフィードバックが行えるシステムの構築
・石狩振興局地域政策課と連携した課外活動に対するフォロー

５　圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

・夕張高校等との交流
・町内の小学校、中学校、北海道医療大学との交流

６　学校独自の取組・工夫

・当別探究を企画、推進するプロジェクトチームを設置
・北海道大学と連携し、取り組みを研究
・生徒のレポートをもとにした教員によるフィードバックの作成
・探究活動に必要となる基礎知識のテキストを作成
・探究活動ポータルサイトの運用

７　その他特記すべき事項

資料　当７

北海道当別高等学校地学協働コンソーシアム規約

（名　称）

第１条　本コンソーシアムの名称は「当別高等学校魅力向上コンソーシアム」（以下コンソーシアムという。）とする。

（目　的）

第２条　地域とともに未来を切り開く生徒を育てるため、また、地域人材育成のため、地域と協働したカリキュラム開発や学校運営を行い、当別高等学校の教育活動をよりよいものとし、魅力化を図ることを目的とする。

（活　動）

第３条　コンソーシアムは、前条の目的を達成するため、次の活動を行う。

１　地域連携の推進に係る活動

２　地域人材の育成に係る活動

３　その他、北海道当別高等学校の魅力化推進のための諸活動

（組　織）

第４条　コンソーシアムは、北海道当別高等学校と地域との連携・協働の推進に係る機関、団体、個人をもって組織する。

２　コンソーシアムには、連絡調整を行う事務局を置く。

３　コンソーシアムには、活動の方針を審議するコンソーシアム会議を設置する。

（コンソーシアム会議の運営）

第５条　コンソーシアム会議は事務局が招集する。

２　コンソーシアム会議は、原則年４回開催する。

３　会議の進行は、北海道当別高等学校地域コーディネーターが行う。

（事務局）

第６条　北海道当別高等学校に事務局を置き、コンソーシアムに関する事務を処理する。

（規約の変更）

第７条　この規約は、コンソーシアムの議事を経なければ変更することはできない。

２　この規約に定めるもののほか、コンソーシアムの運営に関して必要な事項は、コンソーシアムと北海道当別高等学校長の協議により別に定める。

資料　当７

当別高校コンソーシアムの目標

◆短期的な目標

授業や授業外で、高校と地域との連携を図っていき、高校生には当別町についてより知ってもらい愛着を持ってもらうこと、地域には当別高校について身近に感じてもらうことを目指します。

具体的には、当別高校 CLASS プロジェクトでは、「高校」と「地域」が繋がり連携を図るために、主に「総合的な探究の時間」を活用し、生徒が地域について学び、触れ、そして自ら課題を設定し、解決策を考える力を養うカリキュラムを進めていきます。
※より具体的な授業やプロジェクトについては、個別相談、連携を密にはかり、会議内では情報を共有することとします。

◆中期的な目標

当別高校の生徒に、当別町に愛着を持ってもらい、当別町の企業や農家に就職することや、一度卒業した後、U ターンや I ターンする人が増えるよう、郷土愛を醸成していくことを目指します。

具体的には、地域資源を活用することや、地元の人々と触れ合う授業の実施、さらに授業外での活動においても当別に住む方々とのコミュニケーションを増やすことを進めていきます。

◆長期的な目標

地域の高校ということや、地域で高校を支えていく、という意識を地域の人々に浸透させていくことを目指します。
これは現在、課題となっている定員、倍率の低下から、高校の規模縮小や再編整備対象となるリスクを孕んでいるためです。地域側からの視点において、地域から高校がなくなることによる地域衰退や、反対に高校を中心とした地域活性化の例から、取り組んでいきます。

具体的には、高校の魅力化という面において、各分野の方から意見やアイディアをいただき、検討、推進していくことを行っていきます。

要約

1．当別高校の総探は**振り返りを重視**している。
→発表などの成果より、**学びそのものが重要**であるため。
→方法は**①教員との面談**
②生徒のレポートに対するフィードバック

2．生徒のレポートから、新たな**行動目標を作成**
→生徒には目標として、教員、地域には学びの観点として活用

3．地域との協働には学校側から
①何を育成するための活動なのかという哲学の共有
②具体的なお願い
を伝えることが必要。

当別高校総探の目的

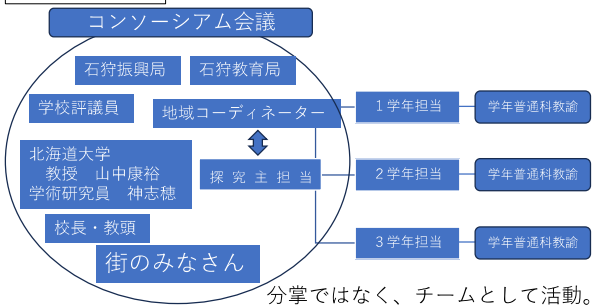
① 自分はどのような生き方をしたいか、というビジョンを持てるようになる。
② 実践活動を通して、物事をやり遂げる力を身に着ける。
③ 生徒に小さな成功体験をプレゼントする。

これといった取り組みができなくても、**成果がなくても、**
「この活動から○○に気が付いた」
「○○を学んだ」
「○○が必要だと分かった」
という振り返り、発表になることを目指す。

教員は**①生徒と行う面談は【学び】【企画運営】の２つの側面から実施**
②生徒のレポートに対してフィードバックを実施

体制・活動の概要

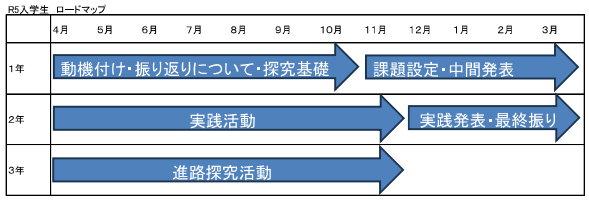
本校の体制



分掌ではなく、チームとして活動。
固定時間割上で週に１回、打合せ。

探究基礎はテキストを作成し、それをもとに進行

テキストやレポート、活動の経過はサイトで共有



CLASSプロジェクトの成果　Class

【地域や産業界等との連携・推進】「Collaboration」「社会に開かれた教育課程」を視野におき、**育成すべき資質・能力を踏まえた地域や産業界との連携による**探究活動の実施等について、各圏域において他の高校と「取組の成果」の交流や情報交換を行うとともに、**地域の教育資源を活用するなど、関係機関等との連携を図る。**

育成すべき資質・能力を【６の力】として明示し、ルーブリックを作成

	4	3	2	1
尊敬心	自分の長所を述べることができ、短所がある自分を大切にすることができる。その上で、自分と違う他人の考えを大切にすることができ、その人を賞賛することができる。	自分の長所を述べることができ、短所がある自分を大切にすることができる。その上で、自分と違う他人の考えを大切にすることができる。	自分の長所を述べることができ、短所がある自分を大切にすることができる。	自分の長所を述べることができる。
創造力	すでにあるものを組み合わせて、当高で誰も見たことがないもの、企画を作ることができる。	すでにあるものを組み合わせて、ものや企画を作ることができる。	すでにあるものを真似てものや企画を作ることができる。	すでにあるものや企画を調べることができる。
積極性	未知の出来事に対しても、人に促される前に、自分から行動することができる。	人に促される前に、自分から行動することができる。	自分から人に話しかけることができる。	友人や知っている人と一緒に何かの活動に参加することができる。
探究力	最初にたてた問いの答えを疑い、新たな問いをたてることができる。	最初にたてた問いの答えを疑うことができる。	最初にたてた問いの答えを根拠を持って述べることができる。	最初にたてた問いの自分なりの答えを述べることができる。
協調性	自分の知らない人、嫌いな人とでもいやな顔をせずに、目標を共有して一緒に活動することができる。	自分の知らない人とでも目標を共有して一緒に活動することができる。	自分が知っている人たちに対して、いやな顔をせずに目標を共有して一緒に活動することができる。	自分が知っている人たちに対して、目標を共有して一緒に活動することができる。
課題解決力	問題にとらわれずに、どのような状態が解決かの答えを自分で作ることができ、それに向かって進むことができる。	問題にとらわれずに、どのような状態が解決かの答えを自分で作ることができる。	問題に注目するのではなく、何が解決かに考えを向けることができる。	問題を解決できるのは自分だという気持ちを持てる。

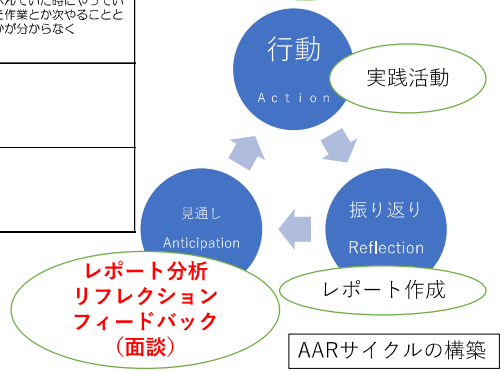
生徒が自己評価するには読みにくい　生徒の実態に即しているかの検証が必要

生徒のレポートを元に６の力を具体化・分解

成功させるための作戦	ゴールのイメージ	話す	考える	情報共有
自分たちはどこで勝負すればいいのか	こんな発表にしたい	勇気をだして事業者さんに話をしたり	解決を考える@@	個人個人で作業するんではなく、細かいところも共有
原価の計算	解決を考える@@	会話に関連性があることを考えながら話す	他の人たちの案を見て自分では思いつかないような名前がたくさんあってこんなふうに考えればいいんだと思い@@	嫌らない人でもちゃんと考えてくれてるのがわかった
まずは相手にとってのニーズとは？それを考えた上で企画・運営や開発・販売@@			お店の経営でどれくらいの値段で売ったら利益が出るのかどの価格だとお客様は食べてくれるのかなどを諸々考えて@@	休んでいた時にやっていた作業とか次やることとかが分からなく
利用者の目線になって考える@@			利用者の目線になって考える@@	
お客様だけを考えるのではなく、スタッフの人のことも考えて@@			まずは相手にとってのニーズとは？それを考えた上で企画・運営や開発・販売@@	

生徒のレポートから抜き出したため、ルーブリックよりは本校生徒にとって読みやすい。

一部抜粋、３年生の活動後のレポートから６の力を１５項目に分解。**新たな生徒の行動目標・伴走する教員・地域の方の助言目標**とする。

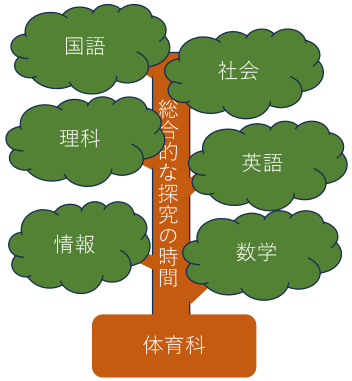


AARサイクルの構築

CLASSプロジェクトの成果　Class

【学んだことを将来に生かす能力】「Literacy」学校や地域の特性に応じて、リテラシーの育成と発揮の場面を「総合的な探究の時間」などに設定し、**課題解決を通じた知識とスキル獲得のプロセスにおいて**、教科の枠組みにとらわれずに、知識を日常生活に関連付けながら、**様々な分野を横断的に統合**させる学習の充実を図る

教員研修で次年度以降、次のような協力体制をとることを打診



振り返りを意識したレポート作成（国語）
課題発見のきっかけとして、社会問題、環境問題を扱う（理科・社会）
スライドの作成（情報）
プレゼンの練習（英語）
データの読み方、論理的思考、批判的思考を養う（数学）
あきらめない精神力と、体力、レポートの習慣化（体育）

共通テスト受験をする生徒がいない状況だからこそ、基礎教科を学ぶ意味を再定義

CLASSプロジェクトの成果　Class

【大人と子供が一体となった取組の推進】「Adult」生徒のみならず**地域の大人が共に地域課題探究型の学習に参加して、**新しい価値を創造する人材やグローバルな視点をもってコミュニティを支える地域のリーダーとなる人材、専門的な知識・技能を身に付けて地域や産業界等に求められる人材など、**地域の未来を創る人材を育成**する。

地域コーディネーターに依頼（または自己開拓）し、街の方々に依頼

学校が総探の学びをどのように位置づけているか、という哲学の共有が欠かせない。

- 何を育てるのか？
- どう育てるのか？
- 失敗（の様な事）をどう学びに結び付けるのか？

１学年対象の対話の練習では、地域コーディネーターに依頼し、相手になってくださる地域の方を募集。

企画に参加して下さる地域の方とは１時間～２時間の事前打ち合わせで哲学の共有を実施したことも。

哲学が共有されれば、地域の方の個々のリソースを有効活用できる（**方法論に陥らず、それぞれの得意分野で育成ができる**）。

地域コーディネーターと仕事をして一番助かったのは【学校の哲学を理解してる人を連れてきてくれた】

学校は△△**という目的**で、○○**という手伝い**が必要なんだけど、やってもらっていい？？

何か手伝いたいけれど、何をしていいかわからないから、**【○○という手伝い】**が必要。【○○】が提供できても、**【△△】という哲学が共有できていなければ、先生、生徒、地域の方の方向性がばらつく。**

コーディネーター

何か手伝いたいけど、具体的に何をすればいいんだろう？

コンピテンシーの育成には実践の場が必要だけど、どうしたら町とつながれるだろう？

地域

学校

学校は何をどう育てたいのか、という明確な哲学を持っていないといけない。